

# 平成 29 年度 道徳教育東京勉強会 報告

府中市立府中第三中学校長 森岡 耕平

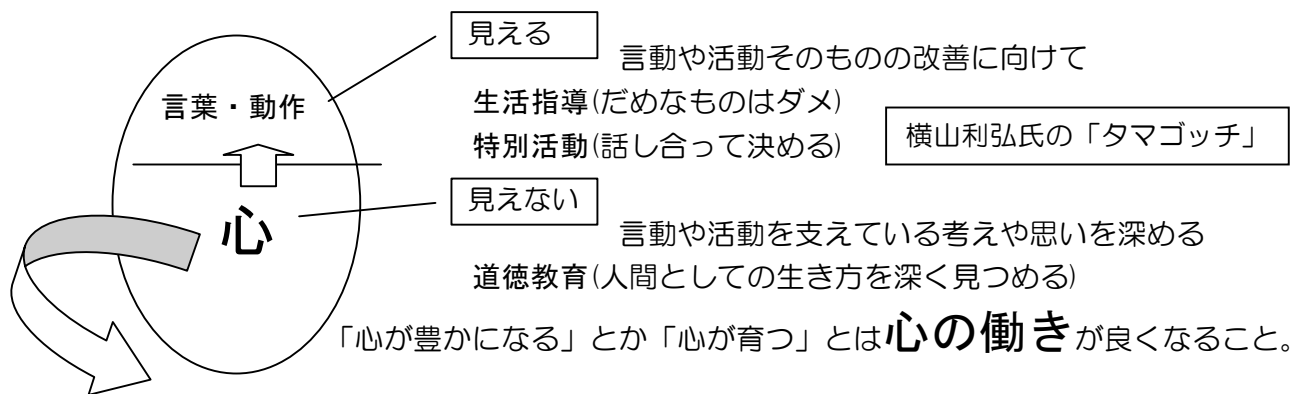
「特別の教科 道徳」の実施に向けて秒読みとなった平成 29 年度、横山利弘先生を講師として、年間 7 回の勉強会を開催した。今年度も読み物教材を取り上げ、その授業づくりに向けた検討会を実施した。4～6 人のグループワークで教材を読み、どのような中心発問をたてるか、意見交換を行い、その後に横山先生からご指導・ご助言を頂いた。

その教材に描かれた人としての生き様をどこまで読み込んだか、またそのねらいとする道徳的価値についてどこまで深く捉えられたか、教科化が迫る中、道徳の授業づくりの基本を改めて押さえた上で、評価の考え方、在り方について以下のように学んだ。

## ■ 道徳の時間の基本的な授業づくりを考える

### 1 「心を育む」、「心を豊かにする」道徳の授業の捉え方

教科の指導は知らないことを知る喜び（知の獲得）、道徳の時間は知ってることをさらに深く考える喜び（価値の自覚）によって成り立つ。「教師が生徒の心を育てる」とか「教師が生徒の心を豊かにする」のではなく、「育つ力は子供の側にある」「子供自身の力で育つ」という理解に基づいて、年間 35 時間の指導を考えていく。



判断力（ある言動のもととなる考え）

心情（美しいものを「美しい」と感じ、まずいことをしたら「いけない」と感じる気持ち）

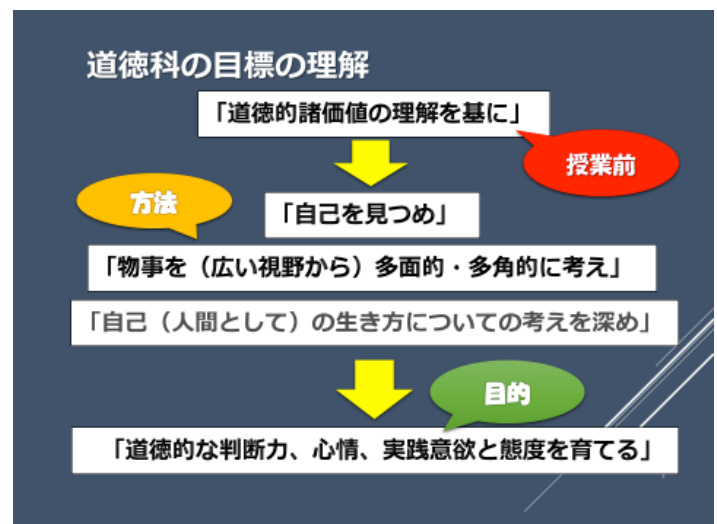
意欲・態度（「前を向く」とか「向きを変える」など言動の手前にある心の構え）

### 2 道徳科の目標を理解する

#### 「特別の教科 道徳」の目標

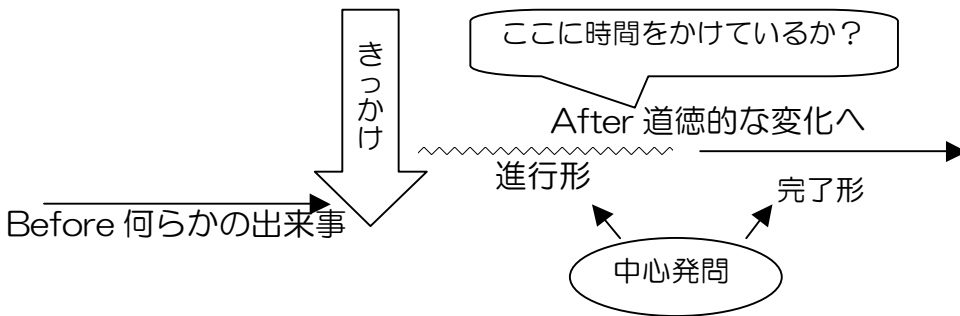
「…よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うために、道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考え、自己の生き方についての考えを深める学習を通して、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる。」

（改正された道徳科の目標）



### 3 道徳科の授業づくり—読み物教材の活用—

(1) 生き方を考える有効な教材の構図(「Before, After 人生の立て直し」横山利弘氏)  
読み物教材の多くはこのような構図で作成されている。



『「誰が変化したのか」、「きっかけは何か」、「何で変化したのか」を考える』

人が、人生の中で何かを「自覚する」とか「深く考える」ということは、日常のいつもと変わらない場面ではおこりにくい。

それは、今までの自分の考え方では対応できない「何らかの出来事」に遭遇した時に否応なしにおこる。その出来事に悩み、苦しみ、新たな自分づくりをして、それを乗り越えていく時に価値の自覚がある。それを教材の中で、道徳的な変化に向かう主人公が、どんな思いで、また何を考えてそうしたのかをじっくり考えることを通して擬似的に体験する。

主人公の思いや考えに迫ることで、人としてよりよい在り方、生き方を見つめることができる。道徳の教材を読むとき、読み物教材の文章の構成やつくりを読むのではなく、「道徳上の問題」を取り上げた読み方をすることが大切である。その上で授業の山となる中心発問を考える。

(2) 一人の生き方から多くの人の思いを考える教材

教材を読むということは、「人間の何を考えさせるか、何に触れさせるか」それを一緒に考えようとする姿勢が大切である。そのための発問をどう立てるかを考える。道徳の教材としてつくれたものの多くは、(1)に示した「Before, After 人生の立て直し」で迫ることができる。

しかし、一人の人の生き方の変化を捉え、その生き方を変えた思いや考えに迫ること田下でなく、そこに関わる多くの人の思いや願いを考えることから生き方に迫る授業づくりも考えられる。

<実践事例>

■主題名 「受け継ぐということ」 内容項目 C17 我が国の伝統と文化の尊重、国を愛する態度

■教材名 「運命の木—姫路城の大柱」(あかつき)

■ねらい 西大柱を再建しようとする多くの人々の様々な思いから、我が国の伝統や文化が後世にどのように伝えられているかを知り、その継承と創造に努めようとする人々の思いを深く考える。

■展 開

	学習活動	授業者の発問や指導内容と予想される生徒の反応	指導上の留意点
導 入	<ul style="list-style-type: none"> <li>資料への導入。姫路城の写真を見る。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>〇このお城、知っていますか。(姫路城の写真を掲示)(解説)現兵庫県に1346年築城。白鷺城。世界遺産に登録</li> <li>〇このお城についてのお話から始めたいと思います。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>〇時間をかけず、進める。</li> <li>〇短く解説する。</li> <li>〇資料配付し、資料名を板書する。</li> </ul>
展	<ul style="list-style-type: none"> <li>資料を読む。</li> <li>流れを押さえる。</li> <li>木組みされた運命の木を確認する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>〇範読する。</li> <li>〇このお話の流れ、わかりましたか?木組みってわかりますか。もし運命の木かなければ、どうなりますか。「城が崩れる」「木の代わりに何かでつくる。」「コンクリートにする」⇒それは絶対に避けたいこと</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>〇授業者が範読をする。(15分)</li> <li>〇西大柱の写真を掲示し、木組みを短く解説する。板書する。</li> </ul>

開	<p>・発問について考える。発言する。</p>	<p>「西大柱の再建は、どんな人たちの、どのような思いが込められているだろう。」</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・加藤さん「この城を残したい。守りたい。」</li> <li>・牛尾さん「自分を支えてくれた姫路城を今度は自分が」</li> <li>・瀬加村の人々「村のご神木を姫路城再建に」</li> <li>・和田さん・大工さん「自分たちの技で再建したい。」</li> <li>・木曾山中の人々(営林署)「巨木を探し出す」</li> <li>・5万人の署名を集めた人、署名した人「姫路城再建を」</li> <li>・10万人の見物人「姫路城が見たい」</li> <li>・この史実を知る人たち「姫路城を守りたい」</li> </ul> <p>「ここにあるみんなの思いとは何か。」</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・これまでも人々が守ってきたから</li> <li>・私たちの生活の一部にあるものだから</li> <li>・後世に残したい</li> <li>・その時代を知る大切な手がかりだから</li> <li>・昔の人の技が生きている</li> <li>・世界遺産として貴重だから</li> </ul>	<p>○隣同士で意見交換後、全員に発言を求める。</p> <p>○板書する</p> <p>○ワークシートに考えをまとめる時間をとる。全員に発言を求める</p> <p>○「なぜ守りたいか」、「なぜ必要なのか」、「なぜ残したいのか」等問い返し共に考える。</p>
終末	<p>本日の授業の感想をまとめる</p>	<p>○本日の授業を通して感じたことをワークシートにまとめさせる。</p>	<p>○時間があれば数名に発表させる。</p>

■評価 姫路城再建に込められた多くの人々の思いが伝統や文化を支えていくことを知り、伝統や文化を大切にしようとする思いを深く考える

■板書

「運命の木 姫路城の大柱」



加藤さん

牛尾さん  
瀬加村の人々

和田さん  
一〇〇人の大工さん

木曾山中の人々  
5万人の署名者、集めた人  
10万人の見物人とこの史実を知る人々



現兵庫県に1346年築城。別名、白鷺城。世界遺産に登録

人々の思い

守ってきた生活の中にある未来に残したい歴史を知る手がかり  
日本人の技術  
世界的な宝

なぜ伝統、文化を守らねばならないのか

- ・多くの人の大切にしたいという思いがあるから
- ・人々の思いが繋がっているから

■生徒の感想

「今の姫路の町があるのは、姫路城があったからこそと思った。みんなが姫路城を愛し、姫路城の美しさに誇りを感じている。みんなにそういう気持ちがあったからこそ改修もできた。」

「自分の生まれ育った場所にずっとあるものは、なくなってしまうと誰かが思う。それが何百年も前からあるものであれば、より強い気持ちで残したいと思う。」

「伝統、文化だから何でも残せばよいというものではない。特に形ある物は今の私たちの生活や未来に残す価値があるか考えなくてはならない。それを決めるのは誰か、難しい。」

## ■「特別の教科 道徳」（道徳科）の指導と評価に向けて

### 1 道徳科における評価の基本的な考え方

評価は、道徳的諸価値に照らしてよりよく生きることを広く、深く考える授業ができてこそ、評価につながる。また、その評価が指導に繋がるものでなくてはならない。

評価の記述は

- (1) 数値による評価ではなく、記述式であること。
- (2) 個々の内容項目ごとではなく、大きくくりなまとまりを踏まえた評価を行うこと。
- (3) 他の生徒との比較による相対評価ではなく、生徒がいかに成長したかを積極的に受け止め、励ます個人内評価として行うこと。
- (4) 学習活動において生徒がより多面的・多角的な見方へと発展しているか、道徳的価値の理解を自分自身との関わりの中で深めているかといった点を重視すること。
- (5) 道徳科の学習活動における生徒の具体的な取組状況を一定のまとまりの中で看取ること。

とされている。その評価を生活の中で考える。例えば「ある人と友達になる」時、その相手が友達に値するかどうか、その人を「理解」して「評価」することになる。生徒を「評価」する時、どれだけ生徒を理解できているかが問われる。また「理解する」というのは一方向的なものではなく、双方向の関係から成り立つものである。その生徒の本当の姿を見ることができてこそ意味がある。

### 2 道徳科の評価の方向性

（「中学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編 平成29年7月」P111）より

指導要録においては当面、一人一人の生徒の学習状況や道徳性に係る成長の様子について、発言や会話、作文・感想文やノートなどを通じて、以下の視点から評価を考えるとされている。

(1) 他者の考えや議論に触れ、自律的に思考する中で、一面的な見方から多面的・多角的な見方へと発展しているか、

- ① 道徳的価値に関わる問題に対する判断の根拠やそのときの心情を様々な視点から捉え考えようとしている。
- ② 自分と違う意見を理解しようとしている。
- ③ 複数の道徳的価値の対立する場面を多面的・多角的に考えようとしている等。

(2) 多面的・多角的な思考の中で、道徳的価値の理解を自分自身との関わりの中で深めているか、

- ④ 読み物教材の登場人物を自分に置き換えて具体的に理解しようとしている。
- ⑤ 現在の自分自身を振り返り、自らの行動や考えを見直している。
- ⑥ 道徳的な問題に対して自己の取り得る行動を他者と議論する中で、道徳的価値の理解を更に深めている。

⑦ 道徳的価値を実現することの難しさを自分事として捉え考えようとしている等。

といった点に注目して見取り、特に顕著と認められる具体的な状況を記述する、といった改善を図ることが妥当である。

(3) 評価に当たっては、生徒が一年間書きためた感想文をファイルしたり、1回1回の授業の中で全ての生徒について評価を意識して変容を見取るのは難しいため、年間35時間の授業という長い時間で見取ったりするなどの工夫が必要である。

(4) 道徳科における学習状況や道徳性に係る成長の様子の把握は、「各教科の評定」や「出欠の記録」等とは基本的な性格が異なるものであることから、調査書に記載せず、入学者選抜の合否判定に活用することのないようにする必要である。